


海外・現場最前線 からのお便り

海外で活躍する林野庁職員の近況を
シリーズで報告します



セネガルの砂漠化・森林減少と 持続可能な自然資本(蜜蝋)を利用した 森林保全の取組

 在セネガル大使館 榎本大輔二等書記官

セネガル共和国(以下、セネガル)は、サハラ砂漠の南縁、アフリカ大陸最西端に位置しています。北部から中部にかけては少雨であるため、かんきく灌木と草原、そして星の王子様でも有名なバオバブ(1)の疎林が広がり、中部海岸沿いではマングローブ林(2)、南部には熱帯雨林が広がるなど、我が国の本州と同じ約20万km²程の国土の中に多様な植生を有しています。

セネガルは半乾燥草原から灌木の茂るサバンナへの移行地帯にあたる、いわゆる「サヘル地域」を代表する国の一つであり、その植生環境は気候の変動に左右されやすく非常に脆弱です。そのため、有史以降においても大規模な干ばつを繰り返し、近年も1970年前後にサヘル地域一帯で発生した大干ばつにおいて多くの命が失われました。それ以降セネガルでは今現在まで少雨状態が続いており(図1)、さらに農地開発や過放牧等の人間活動の活発化により砂漠化が進行しています。

セネガル政府及び日本政府を含めた各国ドナーは、セネガルの



現場視察中の榎本書記官(右)

砂漠化対策としてこれまでも植林、薪炭材利用対策等を実施・支援してきました。特に2007年にアフリカ連合(AU)の主導によって、アフリカ西岸のセネガルから東岸のジブチの沿岸部までの約7,000kmを植林帯でつなぐことを目指して始まった壮大な計画である「緑の万里の長城」プロジェクトにおいて、セネガルは最も重点的に植林事業が行われた国となっています。

一方、セネガルの中・南部に広がる森林(3)も人口増加に伴う薪炭材の利用増大、森林の農地転用や違法伐採等により減少を続けており(図2)、森林管理を所管



3 セネガル南部の森林と伐採された木材



2 セネガル中部のマングローブ林



1 セネガル北部の草原とバオバブ

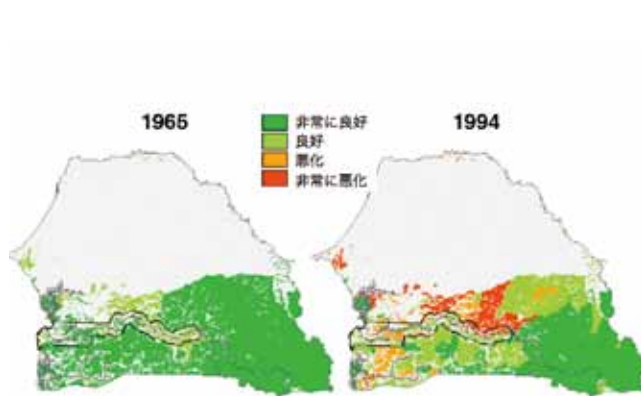


図2 1965年と1994年の森林の状況
※セネガル砂漠化対策国家戦略1998より作成

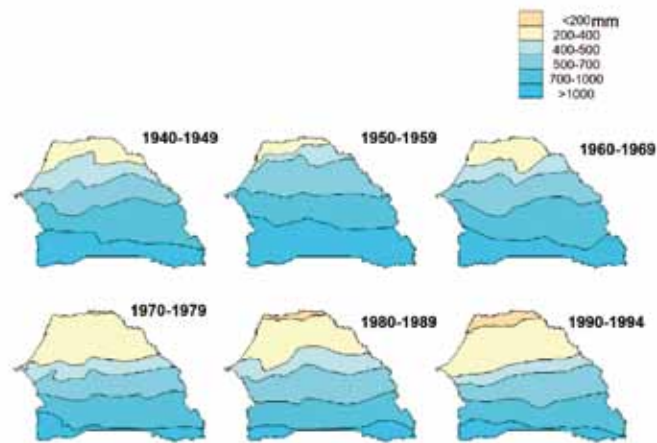
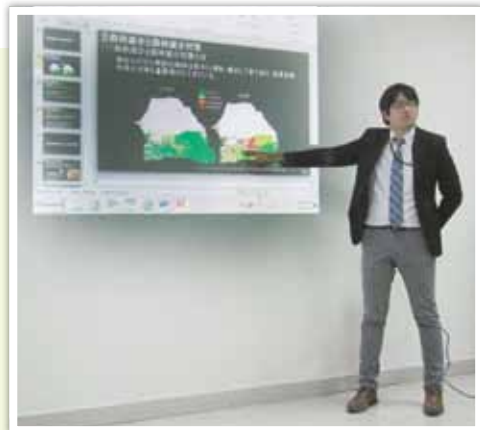


図1 1940年から1994年までの10年毎の降雨量の変化
※セネガル砂漠化対策国家戦略1998より作成



JICAセネガル事務所にてセネガルの砂漠化等について講演を行う榎本書記官

するセネガル環境・持続開発省も近年職員を大幅に増やして、違法伐採の取り締まりを強化するなどの対応を行っていますが、現状すべてに対応できていない状況です。

在セネガル日本大使館では、こうしたセネガルの森林減少の状況に鑑み、2016年から、「草の根・人間の安全保障無償資金協力」等で、自然資本であるミツバチの巣から蜜蝋を精製するための施設の建設及び養蜂家への蜂箱の配布等の支援を行いました。これまでセネガルでは蜂蜜の生産は行われてきましたが、石鹼化粧品や薬剤カプセル等の原料として需要が高まっている蜜蝋に

関してはそのほとんどが利用されることなく捨てられてきました。この支援により、地方に暮らす養蜂家や蜂蜜の精製に従事する女性達にとって蜜蝋事業は新たな収入源となり、実際に従事した女性グループの収入向上につながりました(4、5、6)。

この活動に重要なアフリカミツバチは森林に生息しているため、蜜蝋を得るためには森林を適切に維持・管理しなければなりません。このように森林からの恵みを活用した産業を育成することで、自然資本の一つである森林の持続可能な管理に向け、地域住民に自ら森林を保全する意識を根付かせることが重要です。同支援は、これまでに無い新しい試みでありましたので、関係者や地域住民への協力依頼・調整に時間と労力を大いに費やしましたが、精製施設建設後の引渡式等の機会に地域住民から生の喜びの音が聞かれたことが自分にとって大きな糧となりました。自分が関わったこれらの活動を通じて、将来のセネガルの森林の減少や劣化の抑制につながることを大いに期待しています。



6 精製された蜜蝋は石鹼、化粧品等に利用される他日本にも輸出されています



5 精製された蜜蝋



4 蜜蝋精製研修の様子